資料１

第５回多治見市第７次総合計画策定市民委員会　会議録	
日　　時	平成 27 年５月 19 日（火）午後６時 00 分～午後８時 00 分
会　　場	多治見市役所駅北庁舎　４階　災害対策本部室
出席委員	古池嘉和委員（会長）、木下貴子委員（副会長）、伊藤浜三委員、宇佐見信一委員、奥村崇仁委員、隈元智子委員、前田市朗委員、宮村登美子委員、山田輝幸委員、吉田有記委員、若尾由美江委員 （委員 15 名中 11 名出席）
欠席委員	飯野真理子委員、小池雅子委員、竹本幸二委員、堀尾憲慈委員
事務局	水野企画部長、桜井課長、岩島課長代理、長谷川課長代理、水野総括主査、山内総括主査、御前主査、林主査
傍聴人	３名

会議録要旨

１　開会あいさつ（古池会長あいさつ）

２　議題（１）：第４回市民委員会会議録について

事務局　資料１「第４回市民委員会会議録」について事務局から説明

会長　修正すべき点等あれば指摘を求める。

《なし》

会長　第４回市民委員会会議録とする。

議題（２）：基本構想の策定に向けて

事務局　基本構想について、資料２「第７次総合計画 基本構想の骨格」を用い事務局から説明

会長　「ひとの“わ”」を政策の柱に組み込むための意見を求める。

委員　多治見市は教育環境が充実し、全国学力テストも体力テストも向上している。中学１・３年生の 30 人程度学級も実施しており、中学２年生での 30 人程度学級をＰＴＡとして要望している。

教育環境は居住地選択で重要な要素である。教育環境が整っていれば、通勤に１時間かかっても住みたいと考える家族は多い。その中で、多治見市に住むことを選択してもらうためには、目玉となる特徴的な事業を実施し、成果を明確に示した上でマスコミなどに取り上げられ、東海３県に広く情報発信する必要があるのではないか。笠原地区では、幼稚園から中学生まで英語教育を実施している。こういった取組が必要ではないか。

会長　国際観光都市を政策として取り組む高山市へ行くと外国人観光客が多い。食事をとるために蕎麦屋に入ると、ほとんどの客が外国人で、従業員

のおばあさんも片言の英語で接客をしていた。行政の政策は市に大きな影響を与えるので、多治見市にも何か必要ではないか。

委員　「にぎわいと活力のあるまちづくり」の中で、タイルや虎渓用水、盆地による夏の暑さなど多治見市の誇れるものを再認識してはどうか。

駅に美濃焼のまちとわかるまちづくりが必要ではないか。子どもに美濃焼を教え、美濃焼に接する機会を設け、実体験できる施設も必要ではないか。

会長　土岐市駅は、美濃焼を感じる。多治見駅にも美濃焼の陶壁があるが、文化的な味付けが必要ではないか。

委員　観光には道の駅が必要ではないか。

会長　観光都市を目指す場合、駅はまちの顔になるため重要である。

事務局　多治見市は、観光都市ではなく、衰えつつあるが産業都市として発展してきた。しかし、多治見市には観光資源があるため、国内の主要観光地を観光し尽くした旅行客の旅行先には十分なりうると考えている。この観光資源を生かしていかなければならない。

会長　多治見市には文化資産があるため、文化交流都市を目指すのも選択肢としてあるのではないか。

委員　美濃焼を産業と考えているが、郷土愛を育む教育の対象としても重要ではないか。郷土愛は、幼少期から持つものではなく、幼少期に美濃焼を習い、大人になって美濃焼の魅力を認識することで生まれるものだと思う。それが多治見市の財産を大切にすることにもつながるのではないか。

会長　幼少期からの経験が、将来の愛着につながるのではないか。

委員　郷土愛を育むための教育は重要と考えるが、今の多治見市には不足しているのではないか。

事務局　市内にある21小中学校の全てに焼物を焼く窯があり、各校により詳細は異なるが必ず焼物を作っている。また、「土と版画展」も毎年実施している。しかし、限られた授業時間の中で故郷への愛着というまでには達していないこともある。

委員　美濃焼卸団地の組合では毎年お皿デザインコンテストを実施し、市内の学校に作品提出の広報をしているが、他市からの出品の方が多い。また、自分が幼いころに学校で焼物を作り、今もガレージに残っているが、土遊びをしたという思い出しかない。

愛岐トンネルでは西浦焼が用いられ歴史として学ぶことはできるが、現在、多治見市で陶磁器の生産はあまりされていない。

委員　粘土資源が枯渇すると聞いたことがある。また、美濃焼は、波佐見焼や有田焼と比べて知名度は低いのではないか。

委員　私は美濃焼小売業組合に加入しているが、タイル業界など他の組合との接点がない。「にぎわいと活力のあるまちづくり」には、業種にとらわれず、多治見市の産業を元気にしたい人のつながりが必要ではないか。他の

業種から得られるものがあるのではないか。

事務局　粘土資源は枯渇状態ではない。多治見市では、粘土を採掘する会社の採算が合わなく経営が困難となったことを発端とし、美濃焼未来会議を美濃焼の原料組合、工業組合、小売組合で組織し、今後の美濃焼について考える場を設けた。

委員　美濃焼は日本全国のシェアとしてどうか。

事務局　10 年以上前のデータであるが、市税ベースで 10%未満であった。産業としての美濃焼は厳しくなっているが、歴史を大切にする必要があると考えている。

会長　子どもにとって美濃焼に関わる機会が、学校では難しいのであれば、地域でできないか。

委員　11 月の穴窯フェアでは、実際に登り窯を使った窯焼きをしており、穴窯から出る炎はすごいという印象が残っている。そういった場に子どもを参加させてはどうか。穴窯フェアをやっていることをＰＲしてはどうか。

委員　学校の社会見学でトヨタ自動車に行っているが、地元の登り窯見学など学校教育で美濃焼に接する機会を作ってほしい。

事務局　多治見市も郷土愛を課題と捉え、今年度から始まった土曜学習において、永保寺訪問などと併せて陶芸体験や陶芸家の講話などを取り入れる予定である。

委員　美濃焼の歴史も大切だが、大学施設によるセラミック研究や、陶磁器意匠研究所のデザインなど、今までの知識の積み重ねを活用することも重要ではないか。

委員　美濃焼は全国の販売量の約６割を占めていると言われるが、知名度は低い。そのため、美濃焼のブランド化など言われるが、個人的には高付加価値化が重要と考えている。

会長　陶磁器意匠研究所をもっと活用することで、高付加価値化が実現できないか。

委員　陶磁器意匠研究所ではデザインがメインで、なかなか産業に結びついていない。

事務局　陶磁器意匠研究所は今までデザインに特化してきたためである。

委員　第６次総合計画にも携わったが、政策の柱が市民目線に変わったのでよい。

他の委員も言われたが、多治見市の目玉となる事業を作り、市内外にアピールする必要があるのではないか。多治見市を居住地として選んだ人の多くは、職場などではなく、名古屋への通勤圏内、自然環境、教育環境など住環境によって選択されたのではないか。この理由を分析し、長所を伸ばすことで目玉となる事業を考える必要があるのではないか。

会長　人との多様な関わり方があれば、ずっと住み続けたいと思うのではないか。ひとの“わ”を支援する事業が必要ではないか。

委員　多治見市の魅力は、「都会に近い田舎」であることだと思う。

日帰り観光として、廿原ええのおや土岐のアウトレットなど集客力のある施設が近隣含め存在する。美濃焼も産業ではなく観光資源として活用すれば集客が見込めるのではないか。

廿原で住む家を探している若い世代が何組もいるが、廿原は市街化調整区域で家が建てることができないのは残念だ。

多治見市は車社会であり、車さえ使えれば非常に便利なまちである。そこをＰＲしてはどうか。

委員　防災には、地域とのつながりが必要である。発災時には、まず自分の身を守り、隣人を助け合うことが重要である。そういった視点には、ひとの“わ”が重要になってくるのでは。

委員　子どもの成長には、公園で遊ぶ経験が必要だが、多治見市の公園には遊具がなく、泥遊びもできない。今の子どもを見ていて生活経験が少なすぎると危機感を持っている。子育て環境を多治見市の目玉とするなら、公園の整備が必要である。

今後、家を購入しようとする人に対し、多治見市の子育て環境をアピールしてはどうか。

会長　天白区にあるプレパークのように地域が遊び場づくりに参画する方法もある。限られた予算の中で、量より質を充実させる必要があるのでは。

委員　政策の柱の順番はどのようか。人に関わる政策の柱は、「安心して子どもを産み育てられるまちづくり」「健康で元気に暮らせるまちづくり」「誰もが学び合い、助け合うまちづくり」なので、まとめてはどうか。

陶器関係の仕事をしているため、産業の活性化については、自分たちで解決する必要があると認識している。行政への要望ではなく、産業界が主体となるべきだと思う。

学校での窯の活用だが、オブジェや面などではなく、実用的な湯呑や茶碗を作り、生活の中で長く使えるものの作成に変えた方がよいのではないか。また、今は産業界ではあまりろくろを使わないが、体験に組み込めるとよいと思う。

地場産業の歴史を教育に入れるのは重要だと考える。笠原小学校では、毎年必ずタイル工場に見学に行っている。こういった取組を広めてほしい。

笠原町での英語教育だが、学力を測るテストでの効果はあまり見られない。それは、英語を聞く、話すことを目的としているため、学力テストの書くことでは評価できない。しかし、外国人と積極的に話そうとする子どもが育っているため、評価している。この取組は市内の人にも知られていないので、市内外にもっとＰＲしてほしい。

基本構想に「幸せ」を加えられないか。４つの“わ”で「しわあわせ」などと語呂合わせできないか。

会長　幸福度指数は多くの自治体が取り入れている視点である。

委員　総合計画はどのように市民に発信しているか。

教育の中、例えば公民の授業に総合計画を加え、市民の理解を深めてはどうか。

事務局　広報紙への掲載、ＨＰでの掲載を予定している。総合計画は行政の計画だけでなく、市民に理解していただき、ともに総合計画を実行することで、目指すべき姿を実現することが主たる目的と考えている。

会長　総合計画は行政の計画との先入観があったが、地域力など市民と実現する施策については、呼びかける視点の表現も必要ではないか。

委員　空き家対策が挙げられているが、空き家バンクは実施しているか。

事務局　東濃５市の中で空き家バンクを実施していないのは多治見市だけであり、第７次総合計画策定において検討する必要があると考えている。しかし、他市の状況として、空き家バンクの契約件数は年間数件である。

委員　郷土愛や地元の愛着は、思い出の有無だと考えている。

地場産業について考えると、作り手と売り手のコミュニケーションが足りていないのではないか。

会長　作り手か売り手のコミュニケーションも「ひとの“わ”」で解決できないか。

委員　（当時は）暑さで一番、タイルで一番、陶器が一番であったので何かで一番を目指してはどうか。

会長　政策の柱は市民目線の温かみのある文章となったと思う。並び順については再検討をお願いします。次回はこの骨格から本日の意見を加えて文章として議論いただく。

３　その他

事務局　第６回多治見市総合計画策定市民委員会は６月８日（月）

第７回多治見市総合計画策定市民委員会は６月 29 日（月）に開催する。

第８回の日程調整は、後日連絡する。

＜会議終了＞